

IAIA（国際環境アセスメント学会）と オランダの都市計画の現状

—日本環境アセスメント協会第10回海外特別研修に参加して—

辻 勝也*

1. はじめに

平成14年6月、(社)日本環境アセスメント協会が企画した海外特別研修に参加し、オランダのハーグで開催された国際アセスメント学会、オランダの主要都市における都市計画、港湾施設、廃棄物処理施設等を視察してきたので、本紙をもって報告する。

本研修は、平成14年6月14日から22日ま

での期間（7泊9日）で行われた。スケジュールは表に示すとおりで、期間中はハーグ市内に滞在し、ここから専用バスで視察場所に向く行程がとられた。参加メンバーは、日本環境アセスメント協会の会員で、野村総研の稲見氏を団長とする総勢10名である。以下、視察研修の概要について述べる。

研修スケジュール

日次	月日(曜)	発着地/滞在地	時間	主な訪問・視察先
1	6月14日(金)	東京(成田)発 アムステルダム着 ハーグ着	12:40 17:45 19:30	日本航空(JAL)にてアムステルダムへ 専用バスにてハーグ市の宿泊ホテルへ
2	6月15日(土)	ハーグ	終日	専用バスにてハーグ市内を視察
3	6月16日(日)	ハーグ	終日	デルタ・エキスポ展示センター
4	6月17日(月)	ハーグ	昼間 17:00	フリータイム(アムステルダム観光) IAIA会議レジストレーション
5	6月18日(火)	ハーグ	終日	IAIA基調講演, セッション
6	6月19日(水)	ハーグ	午前 午後	IAIAワークショップ・ロッテルダム建築センター コップ・ファン・ザイドロッテルダム
7	6月20日(木)	ハーグ	午前 午後	IAIAワークショップ・AVIアムステルダム廃棄物処理公社 アムステルダム都市計画展示センター
8	6月21日(金)	ハーグ発 アムステルダム着 スキポール発	20:15	フリータイム(アムステルダム市内)
9	6月22日(土)	東京(成田)着	14:20	到着後, 空港にて解散

* (財)九州環境管理協会 環境部環境保全課課長代理

2. IAIAと主要施設の視察

(1) 国際環境アセスメント学会への参加

IAIA (The International Association for Impact Assessment) は、オランダのハーグ市内の会議場で6月15日から21日までの期間で開催され、基調講演、ワークショップ、パネル展示等により最新のコンセプト、技術などについて国際間での情報交換が行われた。

6月15～16日に任意参加の研修コースの後、17日にはオープニングレセプションが、ハーグ市主催により同市の観光スポットの1つであるマドログムで開催された。IAIAの代表者から参加者への挨拶のあと各国の参加者が歓談した。

この様子は、翌日18日に開かれたIAIA初日の全体会合の中の映像で紹介され、我々日本からの参加者も映像に流れた。議長、IAIA会長の挨拶、南オランダ州王女コミッショナー、シェル石油社長による基調講演のうち、全体のオリエンテーションが行われ、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ、欧州、北アメリカ、オセアニアといったエリアごとの問題とその解決に関するディスカッションが各部屋に分かれ行われた。

翌19日からは、テーマ毎にワークショップが開催された。今回のワークショップでは、戦略的環境アセスメント (SEA)、社会インパクトアセスメント、影響評価における公衆参加、健康への影響評価、生態学的・生物多様性における影響評価、持続可能に関する影響評価、累積的影響に関する影響評価、影響評価後のフォローアップ、環境管理システムと監査、工業発展における影響評価、都市開発における影響評価、環境規制、ダム開発における影響評価、地域間にまたがる水問題に関する影響評価、東欧州における影響評価、ア

ジアにおける影響評価、アフリカ地域における影響評価、インフラプロジェクトにおける影響評価、影響評価とIT、影響評価と人材開発、国際環境影響評価コミッション (ICIA)、IAIA2002の影響評価、影響評価と管理ツールとの関係、国際貿易における影響評価等に分かれて議論が行われた。

日本からは、環境省の上杉氏が「日本における戦略的環境影響評価に関する進展」について、武蔵工業大学の田中教授が「生態系の評価におけるツールの必要性」についてそれぞれ発表されたが、残念ながら別の視察と重なりその場には出席できなかった。

今回の研修では、IAIAの各国参加者に対して、①日本環境アセスメント協会の活動紹介、②相手側の名前、所属等、③アセスメント協会のような活動主体の有無、連絡先等について、会場ロビーでヒアリング調査を行った。これは、今回研修のミッションの1つであった。私も覚え書きメモを片手にヒアリングを試みたが、悲しいかな、質問に答えられない始末。語学力の無さを思い知らされた。

結局、20カ国程度のJAESのような協会が有無に関する情報を収集したようだ。



IAIAが開催された会議場（ハーグ市内）

(2) デルタ・エキスポ展示センター

ヨーロッパの三角州地帯にあるオランダは、国土の半分以上が海面より下にあり、砂丘や堤防によって洪水から守られている。オランダ人は何世代にも渡って洪水に見舞われてきたが、多くの犠牲者を出した1953年の大洪水を契機に、大規模な水理工学プロジェクト計画が発足した。これが1958年から開始されたデルタプロジェクト、すなわち国土を洪水から守る国家計画である。オランダ西南部の入り江を締め切り、オーステルスヘルデの河口に堤防を建設したもので、30年を要して完成した。

ブルグ・ハームステーデにあるデルタ・エキスポ展示センターには、オブジェ、水門の模型、レプリカなどによって、このプロジェクト全体を紹介しており、このビッグプロジェクトの実施経緯、現在の状況を広く外部の人に公開し、理解を得るための施設として機能している。施設を紹介した小冊子には、環境影響についても触れられ、堤防設置後のカキやムール貝の養殖が順調に行われていることで、生態系への影響はないと言っている。

このセンターの周囲一帯には風力発電用の風車が数十基立ち並んでいた。オランダといえば風車というイメージが新しい形で見ることができ、古来から自然エネルギーを利用してきた国民気質がなんとなく理解できる。

(3) ロッテルダム建築センター

ロッテルダム建築センターは、ロッテルダム市観光局に属し、建築や都市計画に関する情報を扱う施設である。

建築センターの案内で、さいころ形の集合住宅キュービックハウスや高層ビルの立ち並ぶ駅前のヴェーナ通り、ロッテルダム港のシ

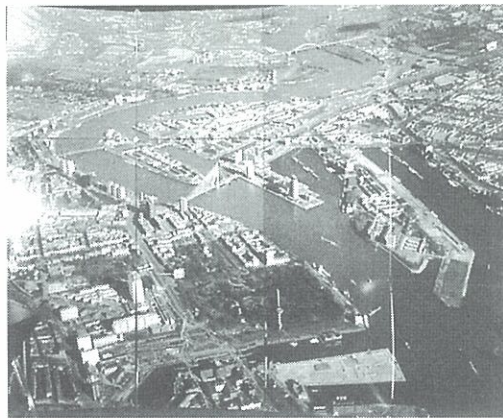
ンボル、ユーロマストなどを視察した。

1940年、第二次世界大戦のドイツによる空爆によってほぼ壊滅状態となったロッテルダム市内の復興を期に、40年もの歳月をかけて市街地の再建が行われてきた。造船所の撤退等もあり、現在は西方に市街地が拡大しているが、再開発計画に基づき、建築家による新しいビルや建築物が建てられている。建造に当たっては、市担当者や学識者からなる建築委員会が高さや仕様を決め、デザインコンペにより建築が許可される仕組みとなっている。

戦後焼け野原の街を再建する際に、オランダの他の都市が古い街並みを再現しようとしたのに対し、この街は近代都市への道を選び、新しい都市計画の理念を実現してきた。ロッテルダムには高層ビルなどの目立った建物だけでなく建築学的に興味深い、斬新かつ機能的な建築物が数多くあり、現代建築において最も重要な都市として知られている。

(4) コップ・ファン・ザイドロッテルダム

オランダ第二の都市で、かつ商業の中心地であるロッテルダムは、世界でも最大規模のロッテルダム港を有し、ヨーロッパの物流拠



コップ・ファン・ザイド（航空写真）

点である。「 Copp・ファン・ザイド」はロッテルダム市並びにロッテルダム市港湾局が行ったウォーターフロント計画である。

1990年代初頭に始まったこのプロジェクトはマース川（ライン河の支流）南岸の旧港湾地区であるビネンハーフェン、アントレポルトハーフェン、スポールウェグハーフェン、ラインハーフェン、ウィルヘルミナピアーを再開発するものである。「Copp・ファン・ザイド」とは「南の頭」という意味らしい。

なかでも中心はウィルヘルムミナピアー地区で、ウォーターフロントに広がる斬新なオフィスビル群、エレガントな高層マンション、リバーサイドの遊歩道などが注目を集めている。

このプロジェクトに際し、オランダ政府及びロッテルダム市は周辺地域のインフラ整備に特に力を入れた。特に目を引くのが全長800m、365ギルダを投じて1996年に完成したエラスムス橋で、ベン・ファン・ベルケルによる斬新なデザインは町のランドマークとなるとともに、市の中心部、ザイドプレイン、環状道路等へのアクセスを向上させた。

なお、ロッテルダム市では、プロジェクト推進にあたり、建築家や国内外の有識者からなるクオリティ・チームという審議委員会を設けて、都市整備と景観について検討している。

(5) AVI アムステルダム廃棄物処理公社

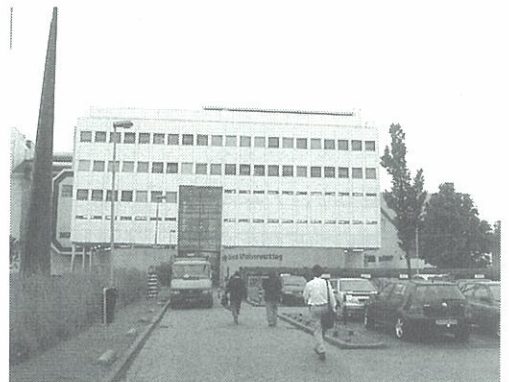
AVI アムステルダム廃棄物処理場は、アムステルダム市によって経営されている清掃工場であり、当時最新の施設として実験的な試みを多数行っている。工場の稼働状況については、常に情報公開が徹底されている。来場者は年間4,000人程度（ただし、15歳以上に

限定）である。また、環境教育の一環として施設職員が学校や地区会館へ出向き、活動内容等について説明を行っている。

現在は、4炉体制で焼却を行っているが、将来2炉の増設計画がある。工業団地内に立地し、最も近い住宅街から1km以上も離れており、施設稼働による環境影響はないと説明を受けた。そこで建設に当たってのアセスメントについて質問をしたが、明解な回答は得られなかった。

当施設では、ごみ焼却と発電が同時に行われており、ダイオキシン対策も進んでいる。日本と同様、オランダでもダイオキシン排出に関する新しい規制が設けられ、国内すべての廃棄物処理施設はこの新基準を満たすための改修が進められている。中でも近年新しく建設された5つのプラントはダイオキシン処理先進施設であり、AVIアムステルダムはトップクラスの処理場だそうだ。

本施設は、1877～1927年まで稼働していた旧来清掃工場を1993年に最新の施設にリニューアルしたもので、流動床タイプの焼却炉4基を有し、24時間連続運転を行っている。処理プロセスとしては、搬入→焼却→エネルギー



AVI アムステルダム廃棄物処理場

ギー・有価物の回収→排ガス処理である。搬入時には生ごみ、紙類、ガラス、缶に分別されており、缶のみが清掃工場にてアルミ、スチールに分けられている。

ダイオキシン類は、活性炭吸着、電気集塵機による除去と、パテントを有している界面活性体を含む再度の活性炭による除去の3つのプロセスで行われており、排出ガスの濃度は排出基準の $1\text{ng}/\text{Nm}^3$ 以下に対してその半分以下で排出している。

(6) アムステルダム都市計画局展示センター

1929年まで教会として使われていた17世紀の古い建物「ザイダーケルク」の中にある常設の展示センターで、アムステルダムの都市計画に関して幅広い情報を得ることができる。ここにはマルチメディアをいち早く取り入れたレーダーガイド情報システムがあり、すべてのプロジェクトの情報を即座に取り出し、紙上と画面で見ることができる。

アムステルダムは古くから地図の製作技術が進んでおり、その技術によってヨーロッパでは例外とも言えるほど計画的な発展を遂げてきた都市である。ここでは古い歴史を持つ都市の最新プロジェクトについて視察できる。主なテーマは自転車利用などを含んだ交通対策、スキポール空港やアムステルダム港の開発、郊外再開発、港湾地区東部の大規模再開発プロジェクトなどがある。

歴史的に観ると、アムステルダムは、11世紀には小規模の漁村が成立しているにすぎなかったが、14～15世紀に主としてスペインとの80年戦争の影響で、ベルギー等からこの地へ富裕層が避難してきたことから街が発展した。中世の街づくりの特徴として、街の周りに用水路（堀）をめぐらすことがあげられる

が、当中心市街地も同様の形状を有している。その後も、この中心市街を囲む形で街が発達し、近代になってからは造船規模に応じて河川沿いに大規模造船施設が展開した。現在は、イギリスの影響もあり、郊外から市街地へ通勤するという生活スタイルが浸透し、郊外の緑の多い住宅街も形成されている。

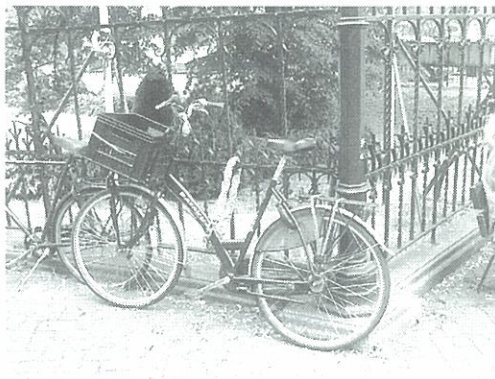
3. オランダの印象

(1) オランダのプロフィール

オランダの正式名称は「ネーデルランド王国」。日本語でいう「オランダ」は実はポルトガルから日本に伝わった名称だそうだ。因みに、ネーデルランド Nederland とは「低い土地」という意味。面積は 4.1km^2 （九州とほぼ同じ）、人口は約1,600万人、首都はアムステルダムである。現在、この国は女王を国家元首とする立憲君主制をとっている。

(2) こわい自転車道

オランダは低い土地の国であるため、自転車天国といわれるとおり、かなり狭い道でも自転車専用道路が設けられている。歩道との間に段差がないため、日本人観光客はついこ



オランダで一般的な自転車

の専用道路を歩いてしまうらしい。我らが視察団のメンバーの1人も危うく自転車に接触しそうになり、自国の人から怒鳴られていた。

(3) 夕食はもっぱらオランダ以外の料理

期間中はすべてハーグに滞在していた。ホテルの朝食もだんだん飽きてくるし、初めの頃に食べていたオランダ料理もさほど美味しくない。そんな理由で夕食は、ハーグの海岸までトラム（路面電車）で出かけ、オランダ以外の国々の料理を食べるのが日課になっていた。イタリア、中華、メキシコ料理等のレストランがこの海岸には数多くある。個人的にはインドネシア料理がとても美味しいと思ったが、一方では昼食で食べた日本食はそうとも言えず、外国で和食がこんな味で紹介されているのは残念なことである。

オランダのビールと言えば「ハイネケンビール」が有名だが、近隣国のビールも飲める。中でもベルギービールは美味しく、日本酒と同じアルコール度数のビールは最高に酔わせてくれた。

(4) 覚えたオランダ語

オランダ語は英語とドイツ語の中間のような言葉で、どちらにも似ていると言われるが、ガイドや通訳の話で覚えたオランダ語は、ja ヤー（はい）とnee ネー（いいえ）だけである。ガイドのja, ja, jaを連発する話しぶりは、駄々をこねる子供のように聞こえて面白い。

(5) 日本人には厳しいトイレ

オランダの公衆トイレは有料制のところがある。場所によって異なるが、1回あたり20～50セントを払ったと思う。男性用トイレで

思いしらされたのが、オランダ人と日本人との体格差（足の長さ）である。つま先を立てて背筋を伸ばしながら用を足すのは私だけでなく、大抵の日本人は至難の業である。有料トイレだからこそ悔しい。

(6) アムステルダムの観光スポット

滞在期間中にフリータイムが設けられ、数名のグループでアムステルダムを観光することになった。ここを幾度か訪れているメンバーの案内で市内を散策した。「アンネフランクの家」、「ダム広場」、「マヘレのはね橋」などの観光スポットを見て回ったが、どこを撮っても絵葉書になるようなところばかりで、市内を巡らす運河は、さしずめ「規模を大きくした水郷柳川の西洋版」といったところだろうか。

アムステルダムのプレイ・スポットといえば、「飾り窓の女」。百聞は一見にしかずとばかり、観光ポイントの1つに。ここでは、写真撮影は絶対禁止。そんなルールを知らずに、後日ここでカメラを向けたメンバーの1人が窓の女性に追いかけられそうになったのは実際の話である（決して私ではない）。

(7) 22時の虹

オランダの時差は日本より8時間遅れだが、3月末から10月末までは夏時間で7時間遅れとなる。滞在期間中の6月の日没はなんと23時である。ある日、夕食を済ませて遅くに帰るころ、虹が現れた。日本では絶対に見ることができない時刻であった。

(8) オランダでもワールドカップ熱

研修期間中は、サッカーのワールドカップが行われていたこともあって、空港や機内、

滞在ホテル、IAIA会場の何処でもこの話ばかり。特にIAIAの参加者が宿泊していたホテルでは、自国の試合ともなれば、国際会議どころではない。そんな熱いインターナショナルに遭遇できたのも、この研修のおかげだろう。

4. おわりに

環境アセスメント先進国の1つとして挙げられるオランダを訪問するとあって、各視察先

では有効な情報や事例が入手できると期待していたが、それほどではなかった。その代わりに、IAIA会議ではいろいろなテーマで議論されていることがわかり、それは収穫だったと思う。

はじめてのヨーロッパ（といっても1国だけだが）で、公式な視察研修以外でも楽しい時間を過ごせたことに、同行した参加メンバーに感謝したい。

